混迷を極める日本　若者たちの将来は・・・？

２カ月ほど前ついに 70 代となり、現代社会を考えるにつれ、つくづく自分は「昭和の輩」だと感じる今日この頃です。今回は少々批判めいたお話（愚痴？）になりますがご容赦ください。

10 月 21 日に我が国初の女性総理大臣が誕生しました。今風に言えば、「女性初～」という表現も好ましくないのかもしれません。本来この事象は、世界から「ジェンダー後進国」というレッテルを張られている日本としては歓迎すべきことなのでしょう。しかしことの本質を考えてみると、日本中を巻込んだ決定に至るプロセスは、お世辞にも国の行く末を決めるための崇高な指導者選びといえるものではありませんでした（と、私は感じています）。

どうも昨今は、今回の痴話騒ぎのようなゴタゴタが目につきます（メディアの低俗化が大いに加担していると思いますが・・）。２代前の総理の所信表明では「新しい資本主義」という言葉が発せられました。今にして思えばこれは、「我が国の資本主義を強固なものにして経済を発展させる」のではなく、「すべては資本（金・カネ・かね）で決められる！」、と言いたかったのだろうと勘ぐってしまいます。つい最近、株価が「史上初の５万円超えとなる！」と騒いで、証券会社にくす玉が用意され、デイトレーダーは満面の笑み、という構図がテレビ画面に映し出されました。その一方で更に円安が加速し、輸入品高騰による物価高は収まる気配がありません。

これって一体何なんでしょう。

私は常々日本の惨憺たる国力低下は、この「資本（金がすべて）主義」が招いた結果だと考えています。従来日本の技術力を支えてきた大学をはじめとする諸機関には優秀な研究者・学生たちが集い、日夜探求・研鑽を重ねて世界に発信する技術を発見・開発してきました。然るに昨今は、直ちに「金の成る木」となることのみを求められ、学術に関する大幅な研究費削減、学び舎の統廃合が図られつつあり、これでは日本の学術力はますます低下してしまいます。残念ながら現在の大学は、昭和の頃に言われたこの国の「最高学府」と呼べるものとは思われません。このようなことは、最近及び現在教壇に立たれておられる多くの先生方からも伺っております。

現在は国主導で「働き方改革」なるものが浸透しつつあります。この趣旨はご承知のように、「過労死撲滅」を目指した過重労働の撤廃、「働き方ニーズの多様化」のための労働環境整備、投資やイノベーションによる生産性向上や就業機会の拡大等を目指しています。この理念を否定するつもりはありませんが、実際には間違った方向に進んでいるように感じます。過重労働をすることなく、ＡＩ活用等も含めて合理的に仕事をすることにより労働時間を短縮し、その余暇を有効に活用することは私も望むところです。しかし、あまりにも簡単に結果のみを追求はしていないでしょうか。大企業による「青田買い」のための、「初任給大幅アップ、早期昇給・昇格」等のアピールは、今年の春先にメディアを賑わせました。これは政府による、口角から唾を飛ばさんばかりの「賃上げアップ」の連呼に企業が応えたことによります。昭和の高度成長期にはアメリカに次ぐＧＤＰ世界第２位（当時はＧＮＰ）を誇った我が国も現在では４位に低落し、今のままでは更に順位を下げていくのは必定です。こんなことは単純な算数でもわかります。

総労働時間削減(働き方改革）×能力低下した労働力(学術力低下）＜ 昭和の頃のＧＤＰ
（金額換算ではありません）

ＡＩ・ロボット化等を駆使しても、上式の不等号は簡単には変わりません。ハラスメントが横行するからと言って、「退職代行」のような職種が成り立ってしまう世の中になってしまいました。日本人の「民度の低下」が叫ばれていますが、私は若者の「志の無さ」も危惧しています。

社会人となれば、職種に応じて目指す将来像があり、その将来像に向かって自分に投資してゆくのは当たり前だと思っていました。しかし、何故か私の眼には今の若者の多くは冷めすぎているように見えてしまいます。給料が増え、人に語ることのできる肩書は欲しい。その一方で責任ある地位は望んでいない、というのが今の風潮でしょうか。でも本当に 20 年、30 年後の日本を想像してみてほしいのです。その頃は間違いなく今の若者たちがこの国の主役であり、この国の運営者です。でも今のままでは、その頃は某国の「属国」となってしまっている可能性すら否定できないのです。「働き方改革」で護られたハラスメント等による防御壁は「外資」の前でも役に立つといえるのでしょうか。今の株価上昇は、外資による不動産買収・外資企業の日本参入等の影響がその大きな要因となっていることを忘れてはなりません。

私は中高生の頃からＳＦ小説が好きで、このジャンルの映画も良く観てきました。その頃から不思議だったのが、何故宇宙からの来訪者が地球に訪れないかということでした（実際には来ているのかもしれませんが）。地球における宇宙開発の進歩をみるに、惑星間移動までにはまだまだ時間がかかると思いますが、あと 100 年？先には可能になるのではないかと思います。では何故ほかの惑星の究極文明から来訪者は訪れないのか？私の想像した答えはこれです、「いかなる惑星においても究極文明には達しない」。それは何故か。

究極文明に向かおうという生命体は、当然のごとく考えることが出来て「理性と感情」を持合せています。地球上でも、文明といえるものを有しているのはホモサピエンスのみです。このことは必ずや争いを招き、文明は自らの手でその文明を滅ぼして行く、というのが私の考える答えです。つまり、文明は究極文明に到達する前に自滅してゆく運命を背負っている、ということです。実際地球では、いつの時代も世界のあらゆるところで紛争が勃発し、今現在も私たちはその脅威に晒されています。

私の好きな古典的ＳＦ映画に、「禁断の惑星（1956）」という作品があります。初めて映画にロボット（名前はロビー）が登場した作品です。内容は、20 年前ある惑星に移民したのち消息を絶った移民団の捜索隊が遭遇する物語です。この星では高度な文明が栄え、その結果として住民は作り上げた膨大なエネルギーを生み出す装置を利用して、思考により生活することが出来るまでになっていました。しかし、それぞれの潜在意識に生まれた「憎しみ」により、お互いが攻撃を仕掛けて滅亡したというものでした。なるほど、と思いませんか。

今まさに、世界各国で「防衛費の増額」が叫ばれています。人を生かすための金は惜しむのに、恐らくは使用することのない「人殺しのための武器」には金をつぎ込む、という悲しい構図です。仮に各国代表の 20 代～40 代位の若者に各国の全権委任が出来るとして、彼らが一堂に会して戦争放棄を決定すれば、世界から紛争を消滅させることが出来るのではないかと考えます。世界のリーダーたちは、何故将来を担う若者たちにその将来を託そうとしないのでしょうか。それほどまでに権力を持ち、行使するということがこの上ない至福なのでしょうか。私が考える最大の疑問です。

長々と愚痴を述べてしまいましたが、最後にこんな時代遅れの自分にも希望を感じることが出来た事象を紹介して締めたいと思います。

今年３月、エルリではオンラインにて、早稲田大学　小峯秀雄教授より「利他を巡って：利他の土木」と題して話題提供をしていただきました。その際、小峯研究室の大学院生さんにもご参加いただき、様々な観点から意見交換をすることが出来ました。私は常々、「今どきの学生は！」などと思っておりましたが、「若者たちから気づかされました」。若い人たちは、我々ロートル？が考えているよりも、遥かに「世界」や「地球」レベルでものを考えているようで、非常に頼もしく思えると同時に、先入観に侵されていた自分を情けなく思いました。

もっと「今どきの若者」を信用して、未来を託してゆくべきである、と思った次第です。

（副代表理事兼事務局長：伴　夏男）